

平成25年度 第2回 食の循環によるまちづくり推進委員会 議事録

日 時：平成25年10月7日（月）午前10時00分～正午

会 場：新発田市役所本庁舎 2階 第2・第3委員会室

参集者：18名

出席委員	下條荘市委員、佐藤ミネ委員、田辺賢司氏（中村光昭委員代理）、川瀬孝男委員、高山廣伸委員、平山課長補佐（肥田野直子委員代理）、宮野久美子委員、藤巻課長補佐（小野伸子委員代理）、佐藤恭子委員、宮島隆行委員、高橋賢司委員、菅一義委員、渋谷知明委員、川本健太郎委員、小林豊男委員、山口恵子委員、山崎葉子委員、関根暁子委員
事務局	杉本企画政策課長 野崎課長補佐 食の循環によるまちづくり係（中山係長、土田主事）

（欠席委員）

石井寛史委員、斉藤幸子委員、広岡信行委員、三田村秀之委員、阿部慎委員、藤田健委員、西鉄幹委員、木戸寿明委員、成澤強委員、南日厚子委員、金田一努委員、引原美穂委員、宮尾俊輔委員、目黒武志委員、吉川治男委員、小竹英之委員、津村賢委員、赤塚昌子委員、星野龍一委員

1 開会

2 報告事項

（1）平成25年度食の循環しばたリレートーク開催予定について

【事務局】

（資料1・2に基づき説明）

【委員長】

人選については、1回目の推進委員会の際に、小委員会に一任するということでしたので、小委員会にて決定させていただいた。佐藤初女先生については、昨年度インフルエンザで急遽中止になったということと、非常に期待が大きかったということから、再度お願いしたいということで小委員会にて決定した。土井善晴先生については、テレビにも数多く出演し、流暢な関西弁で人気のある料理研究家だと思っている。講演だけでなく、2部構成として、野菜ソムリエの木村正晃氏や市民代表の方に登壇していただくことで、来場者に再度食の循環について認識していただきたい。市民代表については、まだはっきり決定していないとのことだが、どのようなスタイルを考えているのか。

【事務局】

登壇者については、大勢の方が登壇されると1人当たりの持ち時間が少なくなってしまう

うことから、推進委員会からは2名の方をお願いしたいと考えている。資料1ページ目にも記載のとおり、トークセッションのテーマが「地産地消を実現するために何が必要か～食の循環の輪を実現するためには～」ということで、「何が必要か」という秘訣の部分については土井先生にお話していただき、「地産地消」の部分については生産と消費という2つの観点から、1名ずつ登壇していただきたいと考えている。

**【委員長】**

具体的に誰が登壇するかということは決まっていないのか。

**【事務局】**

事前に確認させていただいたリレートーク当日の参加可能委員は6名であった。1つの案として正・副委員長に登壇していただくことも視野には入れているが、本日の委員会終了後に、参加可能と回答された委員の方々に残っていただき、検討するという事も考えている。

**【委員長】**

第28回と第30回のリレートークについてはこのように進めていくということで、よろしくをお願いしたい。

(2)平成25年度下半期食関連イベントカレンダーについて

**【事務局】**

(「2013下半期食関連イベントカレンダー」に基づき説明)

**【委員長】**

このイベントカレンダーは全戸配布済みである。今回は2013年度下半期ということで作成したが、このカレンダーが市民に有効活用されて好評であるということならば、2014年度のカレンダー作成も検討していかなければならないと思うが、事務局はどのように考えているのか。

**【事務局】**

同様に考えている。

**【委員長】**

イベント数が多く、少し見づらいようにも感じるが、実際にこれだけの数のイベントが市内で開催されているということである。

各委員の世帯にも配布されたと思うが、掲示等努めていただきたい。

(3) 平成24年度「食の循環によるまちづくり」事後評価結果について

【事務局】

(資料3に基づき説明)

【委員長】

資料3の項目「4 環境の保全」の成果指標「土づくりから始まる「食の循環」についてイメージできる市民の割合」、「生ごみを分別して堆肥づくりにまわしている保護者の割合」や、項目「5 観光及び交流」の成果指標「食の循環によるまちづくりに取り組んでいることを知っている市民の割合」など、大切な部分の成果が上がっていないという印象である。

生ごみの回収状況について、A委員からお聞きしたい。

【A委員】

学校関係に関しては、自校式の学校の給食残さは少ないが、共同調理場の学校の給食残さはかなり多いという状況である。学校によってバラつきがかなりあり、担当教員が替わることによって教育委員会と話し合いをしてはいるが、昨年度残さが少なかった学校が、今年度は非常に多いということもある。教育委員会と相談して、なぜ残してはいけないのかということ子どもたちに図等で説明することにしたので、来年度から少し期待できると思う。

現在、学校給食のサイクル推進事業取組校は17校あり、来月からは松浦小学校も新たに始める予定である。取り組んでいる学校は、子どもたちと接触する機会があり、「今日はどれくらい残した。」「食事は大切だね。」等と、子どもたちと会話をするが、取り組んでいない学校は残さが多くもったいない。私たちの食事の1ヶ月分くらいが残されているというような現状である。

市民の方に関しては、有機資源センターの受け入れ容量の関係からなかなか広がっていないというのが現状である。農産物のことに関して消費者の立場からお話すると、新発田市の有機資源センターで作った堆肥は非常に評判が良く、消費者にもかなり売れている。その堆肥を使った農産物であるという表示があると、消費者はもっと安心して農産物を購入できると思う。堆肥がどこに使われているのか全くわからない。私たちのホームページを見て、県外から堆肥の注文が来ている。新発田の堆肥は人気があるのだと実感しているところである。

【委員長】

非常に貴重な良い意見をいただいたと思う。学校によりバラつきがあるとはいえ、学校給食の残さは相当量あるのだと思う。食を循環させるんだということを、各学校の担当教員がよく認識することが大切だと思う。

有機資源センターの堆肥が好評だという話は大変ありがたく聞いていた。各集落に行くとき有機資源センターの堆肥のフレコンパックが畑に置いてある風景を見かけると思うが、2～3年前では見られなかった光景だと思う。有機資源センターの職員の方々が丁寧に注

文に応じて畑まで堆肥を運んでくれるという良いサービスがあるのだが、これが功を奏しているのではないかと思う。B委員のご意見をお聞きしたい。

**【B委員】**

先ほどA委員からお話のあった、市外や県外から堆肥の注文が来ているということについては、有機資源センターで作られた堆肥は全て市内で購入していただいております、市外や県外にまで販売する余力がないという状況である。元々市内向けに生産することが目的であり、生産量も限られていることから市外や県外への販売は難しい。

また、堆肥を使用した農産物の表示ということについては、どの農産物に使用されているかまでは把握しきれていないという状況である。アスパラガスについては、PRということも含め堆肥に関する説明書き等も表示していると思う。今後検討が必要だと思う。

**【委員長】**

C委員のご意見をお聞きしたい。

**【C委員】**

イオンショッピングセンターや北共同調理場等に農産物を納めているが、出荷する際に、栽培方法や使用農薬等を記した栽培管理日誌というものを提示し、許可を受けたうえで出荷している。私も有機資源センターの堆肥を使用しているが、消費者からすると本当にその堆肥が使用されているかはわからない。例えば、販売する際に、食の循環イメージキャラクターめぐるのシールを貼る等、農家の方にも使いやすく統一した表示物を作成しないと、生産者としてもどのように消費者に伝えていけば良いのかわからない。そのような表示物を作成すれば、堆肥を使用する農家ももっと増加すると思う。

**【委員長】**

農産物への表示は、市民に食の循環を啓発するうえで有効な手段になると思う。新発田の堆肥を使用した農産物が美味しいということになれば好循環が生まれると思う。来年度の検討事項として、推進委員会や市の関係課等でも検討していくということをお願いしたい。

(4) その他

**【事務局】**

(資料4)に基づき説明)

3 検討事項

(1) 平成26年度における食の循環啓発事業の方向性について

**【事務局】**

(資料5)に基づき説明)

【委員長】

リレートークは食の循環を啓発する大きな柱だと思うが、来年度どのようなスタイルで開催すれば良いのか等、皆さんからご意見をいただきたい。D委員のご意見をお聞きしたい。

【D委員】

リレートークを含め、食の循環の成果をどこに持っていくか。1回の講演会だけ来ていただくような著名で忙しい方よりは、土着感があり、新潟のテレビでもよく活躍していて、1年に何回も来市して食の循環の取組に参加してくれるような方から人選するということも1つの案だと思う。

【委員長】

頻繁にテレビに出演している有名人も良いが、新潟県内で活躍しており、新発田のことをよく知っている方も良いのではないかというご意見だった。

リレートークは伝統になりつつあり、かなりの市民の方々が期待をしている部分があると思う。事務局としては来年度も2回程度開催する予定でいるのか。

【事務局】

期待している方々も根強くいらっしゃるということから、継続するということも考えてはいるが、著名な方による講演のみでは一過性の感じがあることから、近年では市民代表を織り交ぜたトークセッションを開催し、市内の活動紹介の場となるよう内容をシフトしてきており、更なる内容の充実という点については、より一層知恵を絞っていく必要があると思う。今ほどD委員からお話があったとおり、土着感がある方、あるいは過去の委員の発言からあるように、まだ新発田に来られたことがない方等、様々考えられるが、これらの意見を踏まえ、皆さんと一緒に事業の内容や講師候補者等よく検討していきたいと思う。

【A委員】

モットイナイ運動のパンフレットを見ていると、「調理し、食べる。そして残ったものは土に還す」と記載してあるが、実際にそのようなことをしている事業所はあるのか。学校給食では来月から1校増えて18校、環境衛生課の働きかけで取り組んでいる市内地域、企業としては新発田ガス、その他に健康プラザしうんじで開催している料理教室等が、土に還すという部分まで取り組んでいるが、その他の事業所や飲食店等で取り組んでいるのか。土に還すというテーマがほとんど取り上げられていないように感じる。本当は残してはいけないということが前提だが、土に還すということについてもテーマに取り上げていただき、市の運動として盛り上げていって欲しいと思う。

【委員長】

昔はどこの家庭でも自分の家から出た食品残さは、自分たちで土に還すということをしてきたが、最近はそのような習慣が薄れてしまったように感じる。ただ、実際に町部の方が自分たちで堆肥にまでするという事は難しい。そのような場合は回収してもらって、市の有機資源センターで堆肥化するということになるが、有機資源センターも容量がいっぱいという状況である。

今までのリレートークでは、どちらかというと食の専門家を講師にお願いしてきたが、食べ物を土に還すといった内容も1つの切り口になるのかなと感じた。

他にご意見等あるか。

【E委員】

先ほどA委員からお話のあったモットイナイ運動に関して、事業者の取組を少し紹介したい。月岡温泉の旅館、ホテル等で国の緊急雇用事業を活用して、モットイナイ運動に取り組んでいる施設が数件ある。取り扱う食品残さの量が非常に多いため、対応に苦慮しているが、市の取組みに協力し、頑張っているとのことである。

リレートークに関しては平成19年度からスタートしたと思うが、資料3事後評価結果を見てみると、項目「5 観光及び交流」の成果指標「食の循環によるまちづくりに取り組んでいることを知っている市民の割合」が、平成20年度の目標設定時には63.7%だった割合が、平成24年度には54.7%へと下がっている。当初は、「食の循環」を広く市民の皆さんに知っていただくことが目的だったと思う。この目標は当初達成されていたが、今現在、リレートーク自体が必ずしも市民の皆さんへの啓発につながっていないということが事務局の悩みだと思う。講演会となると、ある特定の方への働きかけになっている部分があると思うが、見直しも含めて検討する必要があるのではないか。

【委員長】

このことについて事務局はどのように考えるのか。

【事務局】

土に還すというテーマで講師選定をすることについては、良い参考意見をいただいたと思っている。資料3の事後評価結果からも数値で表れているように、食の循環の過程のうち、残さ処理の過程への働きかけが一層必要だということから、そのような活動をされている方に講師をお願いすることも視野にいれていきたいと思う。

また、食の循環に対する市民の認知度については、今回の資料3には表記してはいないが、平成21年度から数値は年々向上していた。ただ、平成24年度から若年層が調査対象となる食育実態調査へと切り替えたところ、順調に推移していた数値が下がったということは、市の取組みに対する若年層の関心が低く、先ほどお話があったとおり特定の方、高い年齢層への働きかけになっていたということである。開催日程や講師選定の影響もあるにしろ、今までは高い年齢層の方の参加が多く、若年層の参加数がなかなか増加しない

ことから、リレートーク開催の意義を含め、事業内容の検討のみならず、ターゲットをどこにするのかという点についてもしっかりと検討していきたいと思う。

**【委員長】**

これらの件については小委員会等で検討していかなければならないと思う。

(2) しばた食の循環大使の活用について

**【事務局】**

(資料6に基づき説明)

**【委員長】**

1回目の推進委員会において、この件については小委員会で検討するということがあったが、今までに2回開催した小委員会では結論に至っていない。今のところ大使は空席の状況だが、再度委員の皆さんからご意見をお聞きし、そのご意見を参考にして小委員会で検討していきたいと思う。

私の意見としては、大使制度はあっても良いと思うが、大使には一生懸命活動して欲しい。新発田のイベントにたくさん参加してくれて、食の循環をよく理解してくれる方が良い。

**【副委員長】**

有名人ではなく、身近な方をお願いするのが良いと思う。先日、県の全体会議で木村正晃氏が新発田のことをたくさん話してくれて、とても嬉しかった。

**【F委員】**

今ほどお話の出た、しばた食の循環応援団である木村正晃氏を格上げして大使に任命するのが良いと思う。新潟県初の野菜ソムリエとして、以前から新発田のPRをしている。

**【G委員】**

大使の目的について筋立てて考えていく必要があると思う。資料6に記載のあるとおり、永島氏については青空市場マルシェ等を活用して新発田の農産物を首都圏で販売するといった目的があったと思う。大使に何ををお願いするのかということについて考えていけば良いと思う。

**【H委員】**

大使制度自体はあっても良いと思う。人選が問題だと思うが、応援団からの格上げも1つの案だと思う。

#### 【D委員】

最近イベントを開催してもなかなか人が集まらず、伝えたい人に伝わらないという現状だと思うが、考え方は「行く」ということだと思う。例えば、小・中学校に行き行って伝える。このような活動が連携して有機的なつながりへと変わっていく。参加型の教育ということが1番のポイントだと思うので、参加してもらいたい方々のところへ行くことが重要であり、大使には実際に行ってもらえるような身近な方にお願いするのが良いと思う。

#### 【I委員】

G委員と同様の意見で、大使に何を期待するのか固まっていないというような気がする。その部分にブレがあって、なかなか人選につながっていないという印象がある。

#### 【E委員】

観光PRと同じ悩みだと思う。私たちも市の地域資源をPRするにあたり、人間を通じて発信すれば良いのか、今流行りのゆるキャラが良いのか、それともSNS等の媒体なのか。私も皆さんから新しい方策をお聞きしたいと思う。

#### 【J委員】

周知という点については非常に難しい部分があると思う。子どもの学校からもりレートークのチラシをいただいたが、果たしてどれだけの方の心に留まったのだろうかという疑問がある。有名な方をお招きすればインパクトはあるが、特定の方だけが聞きに行くということになると思う。来ない方は来ないと思うので、例えば5ヶ月健診等の際に担当者が出向いて取組みのPRをするのはどうか。口コミの影響は大きいと思うので、私もできる範囲で声かけはしている。

大使に関して、木村正晃氏とは一度お会いしたことがあるが、とても気さくで熱心な方であり、引き受けてくれると思う。

#### 【K委員】

先ほどのD委員の発言のとおり、食の循環を広げることに重点を置く意味で、県内や新発田市に縁深い方が良いと思う。市民に食の循環を広げていくことを1つの目標として、かつ、外側にも発信してくれるような方を選出できれば良いと思う。

#### 【C委員】

中高年の方には理解して参加いただいているようなので、反応の薄い若い世代への働きかけが必要だと思う。直売所等でもやはり若い世代の方が少なく、地場の農産物がどのようなものかわからない人が多い。親がわからなければ子どももわからないと思う。若い世代への働きかけは1番難しいと思うが、それをしなければ、その子どもたちが大きくなった時に同じ状況になってしまう。若い世代の方にも来てもらえるような方を選定したり、ゆるキャラを使うのも方法だと思う。また、子どもたちが集まる場に出向いていける



ようなフットワークの良いPRを考えていく必要があると思う。

【A委員】

大人に伝えても効果が少ないが、子どもは必ず反応がある。子どもに働きかければ必ず親もついてくると思う。

【L委員代理】

大使設置の目的を再考しなければならないと思う。また、人が良いのか、キャラクターが良いのかという手法についても併せて検討しなければならないと思うし、大使を設置する場合、身近な方でよく新発田に来てくれる方が良いと思う。

【M委員】

大使については、具体的にどのの方が良いのかはわからないが、新発田のことをよく理解してくれる方が良いと思う。

話は変わるが、五十公野保育園と川東保育園で食育研究会を組織し、農家の方々と連携している。地場産農産物を保育園の給食に取り入れているが、毎朝年長児の子どもが給食の献立と農産物の産地を放送で紹介している。また、給食試食会を開催し、子どもたちと農家の方が一緒に給食を食べる等の取り組みもしている。

【N委員代理】

食の循環大使というネーミングが、一般的に考えると何をしているのかわかりにくいと思う。

【O委員】

大使のコンセプトが定かでなく、大使に何をしたいのか、何を伝えたいのか、どのようなことを発信し、活躍してもらいたいのか、という部分がぼやけているという現状だと思う。平成23年度に開催されたスポーツフェスタに永島氏が参加された際も、何を伝えたいのかわからなかった。市側が大使に何をしたいのかが明確に相手に伝わっていないという印象を受けた。それは市側が十分に伝えていなかったことが原因だと思うので、新しく大使を選任する際は、そのことをよくわかってもらう必要がある。そして、現場に出向いて一緒に見て、体験してもらうことが1番大切だと思う。また、どの年代をターゲットにするのかということは非常に重要である。大人に伝えることは非常に難しく、子どもの時から理解してもらった方が、その子どもたちが大人になった時にやっと成果が出てくると思う。ターゲットによって人選も変わってくると思うので、その点も十分考慮して検討していく必要があると思う。

【B委員】

大使の目的をはっきりさせるべきだと思う。永島氏には新発田のことを全国的に発信し

てくれることを期待して選定したのだと思う。大使が今までに経験したことを新発田で発信してもらうのか、それとも新発田の活動を全国的に発信してもらうのか。応援団の皆さんにはあらゆる媒体を通じて新発田の活動を発信していただいているが、このようなことを大使に期待していたのだと思う。大使でも応援団でも良いが、個人的には新発田の活動を全国的に発信していただける方が良いと思う。

**【P委員代理】**

食を提供する立場であり、市から販促物をいただいて設置等しているが、販促物に目を向けるのは年代層が上の方が多い。ゆるキャラ等を活用し、子どもの目を引くような掲示物も良いと思う。

**【委員長】**

大使に何を期待するのかという点については反省する部分がある。皆さんの意見を踏まえ、再度小委員会で検討していきたいと思う。今年度は年度途中で大使を置かないということで、検討期間にしたいと思う。予算面では、大使に関する予算が計上されていたと思うが、中途半端に決定するのではなく、1年間かけて小委員会及び推進委員会で検討して結論を出していくという形が良いと思うが、事務局はどのように考えているか。

**【事務局】**

1回目の推進委員会において承認いただいた事業計画案の中には、大使に係る経費として117万4千円の事業予算を組んでいる。委員長の発言にもあったとおり、原則として予算の使い切りということは考えていない。今年度上半期も終了しており、これから大使を無理矢理選定して、ということになると困難な面もあることから、大使の予算は執行しないということも十分にあり得ると考えている。

**【委員長】**

本日いただいたご意見を小委員会で検討し、年度末に開催予定の推進委員会において、しっかりとした方向性を示せるように検討していきたい。

4 その他  
特になし

5 閉会